

言語文化学専攻

国語国文学

中国語中国文学

英語英米文学

ドイツ語圏言語文化学

フランス語圏言語文化学

言語応用学



人材育成の目標

言語にかかわる文化現象の諸領域、すなわち、言語学、文学、文化学およびその関連領域を、言語を通じて根源的に解明することを目的とする。従来の言語単位の専門分野と、言語応用学という言語横断的分野とを合わせ、都市化、情報化、国際化の時代にふさわしい教育研究を実現する。さらに西洋古典学、エリアスタディーズなどの分野をも含めた総合的な言語文化学を修得させることで、鋭い言語感覚と言語運用能力を備えて、研究者、専門職業人を問わず国際社会において活躍し得る人材を養成する。

国語国文学専修

言語文化専攻

専修紹介

本専修は、日本語と日本文学について、知識と視野を広め、研究を深める場を提供しています。

言葉も文学も、時代に応じて変化して来ました。特にめまぐるしく移り変わる現代にあって、古典の世界は遠ざかっていっているように見えます。しかし一方で、言語の根幹的な部分は安定しており、人間の感情やものの見方の根本は古代からそれほど変わらない、むしろ一致している面も多分にあります。言語・文学の時代的な展開、地域やジャンルの位相の違いを視野に入れて対象の特徴をつかみ取り、かつそこに通底する本質的なものをも酌み取る、そういう姿勢を本専修は重視しています。

物事の本質的な面をつかむためには、極めて具体的なことに取り組むことが重要です。文学で言えば作品の本文・作者・時代背景などについて、語学で言えば個々の言語現象について、丹念に着実に調査・考察を重ねていく必要があります。このような実証的な研究姿勢を持つことがまず求められます。その上で、対象に迫るための豊かな発想と深い構想力を持つことが必要で、この両者のバランスが取れた研究ができるようになることを、本専修は目標としています。

教育方針

博士前期課程における研究指導、博士後期課程における論文指導の時間においては、各自の研究テーマとなる作品・言語事象について、本文の精密な読解・注釈、用例一つ一つの検討といった具体的な考察とともに、そのような個々の考察が、研究対象の全体の中でどのような意味を持つかということを発表することが求められ、それに基づいて教員と受講生が議論します。その積み重ねが、修士論文、博士論文となって結実していきます。前期課程においては、国文学研究A～D、国文学研究演習A～D、国語学研究、国語学研究演習、国語国文学総合研究演習1・2などの授業科目も設けられています。ここにおいても基本姿勢は同じで、発表と議論（その集約としてのレポート）が重視されます。もちろん授業科目ですから、自分の専門以外の分野を学ぶ場でもあります（非常勤講師科目を含む）。専門分野の研究を深めるためには、隣接分野についての知識を広め深めていくことが必要なことは言うまでもなく、また、分野によって発想の仕方や焦点の絞り方が異なることもあって、よい刺激になります。

<https://www.omu.ac.jp/lit/jpn/>

専修の特色

教室行事

4月上旬に、大学院と学部共通の「教室ガイダンス兼新入生歓迎茶話会」が開かれ、履修や研究室の利用についての説明があり、また、先輩・後輩間、同級生間の交流を図ります。秋には研修旅行があり、学部生とともに、古典文学ゆかりの神社仏閣や史跡をめぐる。3月には、予餞会が開かれ、大学院修了生・学部卒業生を送り出します。院生はふだん論文指導・研究指導の中で繰り返し発表をしますが、専門領域を越えた院生全体の研究発表会が年2回あり、お互いの研究成果を発表し、議論しあっています。また、学部4回生の卒業論文中間発表会が年2回開かれ、大学院生もそこに参加し、議論やアドバイスをします。このような行事でなくても、大学院・学部指導室（通称：共研）で、院生と学生がともに勉強し、学部生の演習の発表のアドバイスを院生がするというようなことが日常的で、教えることは学ぶことです。

出版物

学術雑誌『文学史研究』（1955年創刊）を、毎年1回刊行しています。「大阪市立大学学術機関リポジトリ」（「大阪公立大学機関リポジトリ」に統合予定）に、初期の論文から最新の論文まで公開されています。

その他の特色

学会活動として、大阪公立大学国語国文学会が組織されています（前身の大阪市立大学国語国文学会は1954年設立）。年に1度開催される総会では、講演と研究発表が行われます。大学院生はここで初めての研究発表をするということが多く、また、卒業生の方々と交流できる機会もあります。近年は現役の高校国語教員の卒業生に講演をしていただくことも多く、教員をめざす学生院生には貴重な経験となっています。

毎年8月に文楽を学ぶ上方文化講座を開催しており、市民にも開かれた講座として20年以上親しまれています。大学院生や学部生も、運営に参加します。

所属教員

丹羽 哲也（日本語学、現代語を中心とする日本語文法）

小林 直樹（中世文学）

久堀 裕朗（近世文学、人形浄瑠璃史）

奥野 久美子（近代文学）

山本 真由子（中古文学）

<div><div></div>丹羽 哲也 教授</div>	<div><div></div>NIWA Tetsuya</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
日本語学	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】	メッセージ・教育方針
現代語を中心とする日本語の文法と意味。「は」と「が」の問題に長らく取り組んできて、『日本語の題目文』という著書にまとめました。それに関連して、係助詞・副助詞、テンス・アスペクト、複文、敬語等々、日本語文法の諸問題を研究してきました。最近は、連体修飾構造・存在文・コピュラ文などの分析を通じて、名詞の文法と意味の考察に重点を置いています。名詞は他の品詞に比べ文法的な性格が顕在的でなく、学界でも研究の蓄積が乏しい中、果てしない道を歩みつつあります。	文法研究の魅力は、普段使っている何気ない言葉の奥に潜む構造や体系の発見と構築にあります。研究指導の際は、個々の用例のきめこまかな分析と理論的な枠組みの構築とのバランスを重視しています。また、現代語を研究対象とするとしても、歴史的な背景をおさえておくことが大切です。

【主要業績】
【著書】『日本語の題目文』（和泉書院, 2006）
【論文】「連体修飾節構造における相対補充と内容補充の関係」（『日本語文法』12 巻 2 号, 2012） 「存在文の分類をめぐる」（『国語国文』84 巻 4 号, 2015） 「性質・状態・動作を表す名詞述語文の「連体型」と「単独・連用型」―「文末名詞文」の解消―」（『形式語研究の現在』和泉書院, 2018） 「名詞述語文としてのモノダ文とコトダ文」（『文学史研究』61 号, 2021）

<div><div></div>小林 直樹 教授</div>	<div><div></div>KOBAYASHI Naoki</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
日本中世文学	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】	メッセージ・教育方針
日本中世の説話伝承文学についての研究。とりわけ現在は、鎌倉後期の遁世僧・無住道暁の学問基盤と彼を取り巻く遁世僧ネットワークの究明を主要な研究課題としています。また、遁世僧の形成する禅律文化圏と伝承世界との交渉の問題についても、無住の著作を中心に据えながら、鎌倉前期の律僧・慶政の著述や天台系律と関わる室町期の『三国伝記』なども視野に入れて、解明することを目指しています。さらに、無住と同時代の歴史叙述『吾妻鏡』の説話伝承的記事の分析にも取り組んでいます。	日本中世の古典テキストを、作者の教養や学問基盤、宗教的環境や人的ネットワーク、時代思潮などとの関わりの中で総合的に読み解いていきます。テキストの丁寧な読みと、それを背後で支える、地道な文献博捜を厭わぬ姿勢とが要求されます。

【主要業績】
【著書】『中世説話集とその基盤』（和泉書院, 2004） 『日光天海蔵 直談因縁集―翻刻と索引―』（和泉書院, 1998, 共編著）
【論文】「『三国伝記』と禅律僧―「行」を志向する説話集―」（『室町前期の文化・社会・宗教―『三国伝記』を読みとく』アジア遊学 263, 勉誠出版, 2021） 「『沙石集』と『宗鏡録』」（『日本文学研究ジャーナル』10 [中世説話の環境・時代と思潮], 2019） 「『沙石集』の実朝伝説―鎌倉時代における源実朝像―」（『源実朝―虚実を越えて』アジア遊学 241, 勉誠出版, 2019）

<div><div></div>久堀 裕朗 教授</div>	<div><div></div>KUBORI Hiroaki</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
日本近世文学	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】	メッセージ・教育方針
江戸時代の文学・演劇を専門にし、特に人形浄瑠璃（文楽）について研究しています。これまで古浄瑠璃から近松に至る浄瑠璃史の流れを「語り」の構造の変化に即して分析したり、近松作品の特徴を修辞の面から分析したりしてきました。近年は、人形浄瑠璃の一大拠点であった淡路の人形座に着目し、その歴史・興行形態・上演作品等を明らかにしながら、淡路座と大坂浄瑠璃劇壇との関係について考察を進めています。また淡路座も含めて、広く人形浄瑠璃の興行史を視野に入れ、現在の文楽に至る伝承過程を明らかにしていこうとしています。	まずは個々の作品を、それらを生み出した時代の文脈に即して解釈することが大切です。我々現代人の好みに適う点を古典作品の中からすくい上げるのではなく、まずは古典を歴史的文脈に返して読み取ることによって、我々が思いもつかないような発想を古典の中に見出し、そこに感動し、ひるがえてそういう発想をこれまでしたことのなかった己を知る。そうした作品との対話が、古典を学ぶ醍醐味だと考えています。

【主要業績】
【著書】『上方文化講座 義経千本桜』（和泉書院, 2013, 共編著）
【論文】「淡路座の『仮名手本忠臣蔵』―現行文楽との相違とその価値―」（『歌舞伎 研究と批評』第 57 号, 2016） 「浄瑠璃『二名島女天神記』の成立と伝承」（『国語国文』第 86 巻第 6 号, 2017） 「近松浄瑠璃における作品構想の連関―『堀川波鼓』『松風村雨東帯鑑』『鐘の権三重帷子』を例に―」（『歌舞伎 研究と批評』第 60 号, 2018）

<div><div></div>奥野 久美子 教授</div>	<div><div></div>OKUNO Kumiko</div>
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
日本近代文学	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】	メッセージ・教育方針
日本近代の小説作品研究。芥川龍之介などの大正期文学を中心に、典拠（種本）や草稿、原稿を使って作品の成立立ちを研究し、また文壇、社会状況など作品が書かれた当時のさまざまな背景の中で作品を読み直す試みを続けている。近年は、大衆の娯楽であった講談本が芥川などの作家に与えた影響について研究し、日本近代文学を育んだ土壌が、西洋文学や古典文学だけではなく、大衆娯楽にも及んでいたことを具体的に立証している。また本学に寄託されている、初代学長で芥川の親友、恒藤恭の関係資料を生かした研究にも携わる。	私が考える国文学研究の最大の目的は、未来に残すべき作品に、今できる最高水準の校訂と注釈を施して次世代へ贈ることです。「源氏物語」などの古典も、そのようにして私たちに受け継がれているのであり、近代文学も五百年千年の後に残したければ校訂と注釈が必要です。大学院の授業も、本文校訂と注釈を中心にすすめています。

【主要業績】
【著書】『芥川作品の方法―紫檀の机から―』（和泉書院, 2009）
【論文】「石川五右衛門ものの明治大正期における展開―実録・講談本から小説・戯曲へ」（『文学』, 2015） 「芥川龍之介「山鳴」―原稿・草稿からの考察」（『国語国文』, 2019） 「芥川龍之介「義仲論」―秋里籬鳥「源平盛衰記図会」と「絵本源平盛衰記」―」（彭春陽・仁平道明編『芥川龍之介研究―台湾から世界へ―』（日本学研究叢書 35）国立台湾大学出版中心, 2021）

山本 真由子 准教授

YAMAMOTO Mayuko

専門分野

日本中古文学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

【研究内容】

平安時代の文学、主に漢文学・和歌、和漢比較文学の研究。平安朝の漢詩文を取めた『本朝文粹』、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』などの漢文学・和歌の作品を中心に、漢語表現と和語表現との関わりを考察し、作品の表現の成り立ち、特質を研究しています。近年は、歌会で作られた和歌に冠せられる序文「和歌序」に着目して考察を進めています。和歌序は、漢文でも仮名文でも記され、和歌に関わりの深い表現がなされます。漢語表現と和語表現とが関わる諸相を具体的に解明しながら、和歌序と和歌を読み解くことを目指しています。

メッセージ・教育方針

平安時代の文学の表現については、漢文学と仮名文学とが密接に関わりながら、相互に新たな表現を獲得し展開していったことが、これまでも幾多の研究によって指摘されています。平安時代の漢文学、仮名文学の作品を読むには、双方の関わりを視野に入れて、多くの文献から適切な用例を探し、注釈を施して、読み解くことが大切だと考えています。

【主要業績】

【著書】『平安朝の序と詩歌—宴集文学攷—』（塙書房、2021）

【論文】「大江千里の和歌序と源氏物語胡蝶巻—初期和歌序の様相と物語文学への影響—」（『国語国文』83-6、2014）

「源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって」（『国語国文』86-4、2017）

「河原院の歌人達の和歌序—集成・校訂および特質・意義の考察—」（『人文研究』69、2018）

学術雑誌への投稿資格

大学院生やポストドクター、博士後期修了者または単位修得退学者、UCRC 研究員は、一定の条件を満たせば、文学研究科紀要『人文研究』や学術雑誌『都市文化研究』などへの投稿資格が与えられます。



文学研究科紀要『人文研究』は、1949年の大阪市立大学法文学部設置と同じ年に創刊され、半世紀以上にわたる長い歴史を持つ研究雑誌です。文学研究科の哲学歴史学、人間行動学、言語文化学、文化構想学、アジア都市文化学（2019年度で学生の募集停止）の各専攻に所属する教員・大学院生の研究成果を発表し、あわせて各専攻の年度毎の研究活動概要を紹介する雑誌として、毎年一巻が刊行されています。『人文研究』に掲載されている論文は、大阪公立大学杉本図書館のウェブサイト内に公開されています。教員・学生だけでなく、広く一般の方々にも文学研究科の最新の研究成果に触れていただくことができます。



『都市文化研究』（年1回刊）は、都市文化に関する研究成果を公表することを主たる目的として2003年に創刊された、大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター発行の学術雑誌です。論文、研究ノート、研究資料、特別寄稿、企画、研究展望、翻訳、書評、学会レポートなどから構成されますが、とりわけ論文の内容を重視し、充実した誌面づくりを目指しています。大阪公立大学大学院文学研究科の大学院生、UCRC 研究員は執筆資格を得ることができます。また、すべてのバックナンバーが UCRC の HP 上で公開されています。

中国語中国文学専修

言語文化学専攻

専修紹介

中国文学、言語、文化を体系的に研究し、幅広い中国学の素養を身につけた専門研究者や高度専門職業人の養成をめざしています。教員スタッフの研究分野は、映画を中心とする現代中国文化研究、中国古代字書史・漢語音韻史、さらに唐代・宋代の文学と幅広く、それぞれが独自の視点から研究を行っています。博士前期課程の段階では、中国というフィールドの奥深さと多様性にまず触れたうえで、研究の土台を築くことが求められます。博士後期課程では、更に一歩進んで自分自身の問題意識をより鮮明にして、本格的な研究活動をスタートさせます。教員スタッフは、これまで蓄積された先行研究を咀嚼したうえで、新たな研究成果を紡ぎだし、次世代の研究者へと伝えることを自らに課しており、新たな視点からの絶えざる探究を使命としています。また、毎年、学外から第一線の研究者を講師として招き、様々な関連領域をカバーしています。課外には教員や院生のみならず、OB・OGや他大学研究者を交えた研究会、勉強会が多く開かれ、活発な研究活動を展開しています。

教育方針

本専修は文献研究を中心としながらも、映像分析という新たな研究分野に取り組む研究者をも養成しています。在籍院生には中国人留学生が多く含まれています。中国国内での4年間の大学生活では、気づきえなかった新たなテーマに本大学院で果敢に挑み、大きな成果をあげています。院生自身の努力と、教員の指導は言うまでもありませんが、大きく寄与しているのは、授業以外におこなっている研究会活動です。例えば、現代中国語動作動詞研究会、映画研究会などが定期的に開かれ、先行論文の批判的検討や、自分の問題意識にねざした研究発表と討議、テキストの精密・正確な読解を旨とする読書会など、様々な研究活動を展開しています。これらの活動に主体的、積極的に取り組むなかで、研究方法を学びとることが何よりも求められています。また研究会ではOB・OG研究者や他大学の研究者との接点が日常的に確保されています。なお、本専修には、「社会人院生」も複数在籍したことがあり、仕事と研究を両立させながら、論文執筆に取り組みました。国籍・世代を超え開かれた研究の場であることも、本専修の特徴の一つと言えます。

<https://www.omu.ac.jp/lit/chn/>

専修の特色

教室行事

教育研究に関する行事として、中国学会を毎年7月に開催しています。主に院生やOB・OGの研究発表の機会として機能していますが、他大学研究者による講演もあり、高度な専門的知識が提供される場でもあります。

出版物

『中國學志』を1986年より、年1回刊行しています。2002年には蘆北賞を受賞し、学術誌として高い評価を得ています。また刊行後には院生が主体となって合評会を開催しています。

その他の特色

各研究分野ごとに、院生・OBなどの参加する研究会が、ほぼ毎月一回のペースで開催され、切磋琢磨を続けています。

所属教員

張 新民 (中国文化学、中国語圏映画の研究)

大岩本 幸次 (中国古代字書史、中国語音韻史の研究)

高橋 未来 (中国古典文学)

張新民 教授		CHOU Shinmin
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科	
中国文化	学位 ▶ 博士（文学）	

【研究内容】

中国語圏の映画の歴史を研究しています。これまで、特に力を入れて研究を進めてきたのは、伝来期の上海映画、1930年代における国民政府の映画文化政策や芸術至上、娯楽中心を主張する「軟性映画」の理論研究および第五世代映画監督研究です。最近は、日中戦争期における日本占領地域の上海、中国東北地区、台湾、特に華北地域の映画製作や上映状況および映画政策について研究しています。

メッセージ・教育方針

学ぶにはなぜかと問うのが大切で、物事の本質を見極める努力を必要とします。学問は芸術と並んで人類共通の言語であり、国境や民族の障壁を乗り越える大きな力を有しており、芸術が人の心を豊かにするように、知的好奇心の追求としての学問は人々に夢とロマンを与えるものです。学問を通して、みなさんが可能性や夢を広げていかれることを期待します。

【主要業績】

- 【著書】『多角的視点から見た日中戦争——政治・経済・軍事・文化・民族の相克』（集広舎、2015、共著）
『日本映画の海外進出——文化戦略の歴史』（森話社、2015、共著）
【編訳】『東亞歴史教科書問題面面観 -- 日本・中国・臺灣・韓国・在日朝鮮人學校』（稻郷出版社、台湾、2015）
【論文】「内省思过与鸣冤责难：日本乙丙级战犯审判电影」（『当代电影』2015年第8期）

大岩本 幸次 教授		Ooiwamoto Koji
専門分野	最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科	
中国語史	学位 ▶ 博士（文学）	

【研究内容】

中国古代字書を主な資料として利用し、中国字書史および漢語音韻史の観点から研究を行っています。これまで、『五音篇海』（1208）また『群籍玉篇』（1188）といった金代（1115－1234）に登場した資料が字書史上に果たした役割や意義、また『五音集韻』（1212）や『皇極経世解起数訣声音韻譜』（1241）などの資料よりうかがえる金・南宋・元の時代の言語音体系、といったテーマで研究を行ってきました。最近は、本邦や欧州において編まれた字書や漢語文法書を対象として、言語接触や中国理解の諸相に関する研究も進めています。

メッセージ・教育方針

言語は時を経て変化します。漢語も紀元前からの長いスパンでその変遷を探求できる言語で、内部の多様性もさることながら関連する他言語との影響関係など広いスケールで考察ができる魅力的な研究対象です。また、言語は各時代の文化なども密接に関わっており、文化的・歴史的な背景とあわせて言語について考えるのも楽しいものです。

【主要業績】

- 【論文】「『俗にマンガリンと呼ばれる漢語の技法』訳注稿」（『中国学志』第37号、2022）
「『漢西字典』の構成について」（『中国学志』第36号、2021）
「金代字書研究概況」（『人文研究』第71号、2020）

高橋 未来 准教授		TAKAHASHI Miki
専門分野	最終学歴 ▶ 筑波大学人文社会科学研究科	
中国古典文学	学位 ▶ 博士（文学）	

【研究内容】

唐代文学を中心に研究しています。これまで主に、晩唐時代に活躍した詩人杜牧の文学と人生を研究しています。どちらかといえば、作品そのものよりも、杜牧がどのような時代にどのように生きたか、どのような思想を持っていたのかについて興味があり、杜牧が著した『孫子』の注釈書に見られる思想と文学作品との関連や、当時の政変に対する処世態度等を検討してきました。また唐・宋時代の詩詞に使用される俗語を取り上げて、その用法と変遷についても研究を進めています。

メッセージ・教育方針

文学を学ぶということは、当時の社会や風俗、文化、政治をとくに学ぶことであり、ひとつの言葉の意味が分かれると他の多くの謎が明らかになっていくような、非常にダイナミックなものです。反対にいえば、ひとつの言葉の意味を解明するためには、作品だけでなくたとえば政治状況や思想や歴史等の面からも検討しなくてはなりません。私はあるひとつの文章の意味を十年以上追いかけていますが、その過程に様々な分野の関連も見えてきて、楽しくてたまりません。皆さんにも、地道な調査の積み上げにより、解明できたときの喜びを味わって欲しいと思います。

【主要業績】

- 【著書】『杜牧研究—杜牧における政治と文学—』（東京学芸大学出版会、2016）
【論文】「杜牧撰『注孫子』の故事と杜佑撰『通典』に関する一考察」（『学芸国語国文学』第48号、2016）
「杜牧撰『注孫子』と杜佑撰『通典』兵典について—故事の引用を中心に—」（『中国学志』第36号、2021）
「杜甫『為華州郭使君進減殘寇形勢図状』訳注」（『中国学志』第37号、2022）

英語英米文学専修

言語文化専攻

専修紹介

英語英米文学専修には、1953年に修士課程（前期博士課程）が、そして1955年に博士課程（後期博士課程）が設置された。英米の文学、文化、英語学における多様な現象を研究対象とし、その専門家、教育者の養成を目指し、これまでに多くの優れた研究者を送り出し、学界に少なからぬ貢献をしてきた。現在、「英文学研究」ではエリザベス朝演劇の風刺性やヴィクトリア朝文学の社会性が、「米文学研究」では小説技法が、また「英米文化学研究」では英米文化のイデオロギー性が、そして「英語学研究」では英語という言葉に存在する規則や構造を対象とした分析が、それぞれテーマとして取り上げられている。そしてそれぞれの「研究」「演習」科目では、研究を目指す上で必須となる精確な読みの力が養われることを目指している。複数教員によって担当される「総合研究」、「研究指導」、「論文指導」においては、発表や討論などを通じて、研究論文執筆の能力が養われることを目指している。

教育方針

本専修では、厳密な英語の読解能力の育成を重視した指導を行なっている。同時に、豊富な所蔵研究資料を利用して学生が主体的に研究に取り組む姿勢を獲得し、その成果を積極的に学術論文として発表する技法の涵養にも努めている。また海外への留学や語学研修を奨励している。ネイティブの教員や海外からの留学生と交流することによって、研究の幅広い視野を獲得できるように心がけている。

専修の特色

教室行事

毎年、10月上旬に修士論文の中間発表会、2月に博士前期課程1回生の授業科目「総合研究」の発表会を行なっている。また、毎年4月に新入生の歓迎会、2月に修了生の歓送会を行なっている。

出版物

大阪公立大学英文学会の機関誌として、『Queries』が毎年発刊されており、多様な研究の成果が公表されている。

『Queries』48号、大阪市立大学英文学会、2015年11月

『Queries』49号、大阪市立大学英文学会、2016年11月

『Queries』50号、大阪市立大学英文学会、2017年11月

『Queries』51号、大阪市立大学英文学会、2018年11月

『Queries』52号、大阪市立大学英文学会、2019年11月

『Queries』53号、大阪市立大学英文学会、2020年11月

『Queries』54号、大阪市立大学英文学会、2021年11月

『Queries』55号、大阪公立大学英文学会、2022年11月

その他の特色

現・退職教員と大学院修了生・現役生および学部卒業生・現役生からなる1972年創設の「大阪市立大学英文学会」(2022年度から大阪公立大学英文学会に改称予定)があり、毎年秋の大会では、英米文学、英米文化、英語学、英語教育の分野に関する研究発表やシンポジウムや講演が活発に行なわれている。この学会は同窓会の役割も果たしており、同期生のみならず、教員と修了生・卒業生、先輩と後輩との交流も盛んである。

所属教員

田中 孝信（英文学、ディケンズ論、19世紀イギリス文学・文化論）

豊田 純一（言語学、認知科学、文化人類学）

イアン・マレー・リチャーズ（英米文化学、ニュージーランド文学論、20世紀文学論）

古賀 哲男（米文学、アメリカ現代詩論、現代文学、北米芸術・詩論）

内丸 公平（シェイクスピアを中心としたルネサンス演劇、シェイクスピア作品のアダプテーション研究）

田中 孝信 教授	TANAKA Takanobu
専門分野	最終学歴 ▶ 広島大学大学院文学研究科
19世紀イギリス文学	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

19世紀イギリスの文学・文化が研究対象です。ディケンズをはじめ、ブロンテ、ギヤスケル、ギッシングといった小説家のテキストを分析しながら、社会的・文化的コンテキストの中で権力による一元化を拒む「異質なもの」をジェンダー、階級、人種の観点から浮かび上がらせ、それらの持つ意味を探ります。近年は特に、イギリス帝国の首都ロンドンの空間構造に関心があり、周縁に放たれる中心世界の眼差し自体が帯びる曖昧性を、文学作品のみならず新聞雑誌や社会学関連の資料からも研究しています。

【主要業績】

【著書】『ディケンズのジェンダー観の変遷—中心と周縁とのせめぎ合い』（音羽書房鶴見書店, 2006, 単著）
『英文学の地平—テキスト・人間・文化』（音羽書房鶴見書店, 2009, 共編著）
Dickens in Japan: Bicentenary Essays (Osaka Kyoiku Tosho, 2013, 共著)
『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』（音羽書房鶴見書店, 2013, 共編著）
『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』（彩流社, 2016, 共編著）
『ディケンズとギッシング—底流をなすものと似て非なるもの』（大阪教育図書, 2018, 共著）

メッセージ・教育方針

文学作品は、作家の環境や思想、読者との関係など様々な要素を背景として成り立っています。特に社会が急激に変化した19世紀イギリスにおいては、文学は社会性を抜きには語れません。作家は社会が内包する問題とどう向き合い、どのように表現したのか。それらを読み解きながら、現代との関連性にも目を向けましょう。

豊田 純一 教授	TOYOTA Junichi
専門分野	最終学歴 ▶ University of Manchester
言語学・認知科学・文化人類学	学位 ▶ 博士 / Ph.D. (言語学 / 英語学)

【研究内容】

私の研究活動では、人間の言語を中心としたコミュニケーションにおける様々な現象を、認知科学を中心に学際的に考察しています。その言語が人間の進化の過程でどの様に派生・形成されたか、また現在世界に約6,000話されていると言われている言語に見られる普遍性と多様性は何であるかが、私の研究テーマの根底にあります。近年の研究で力を入れているのテーマは、現代英文法の類型論的に見た特性、死に関する宗教観と時制（未来形）の関係、視覚動詞の類型論的考察、言語の志向性と言語の教授法・習得などが挙げられます。

【主要業績】

【著書】*Diachronic changes in the English passive.* (Palgrave, 2008, 単著)
Kaleidoscopic grammar: investigation into mystery of binary features. (Cambridge Scholars, 2009, 単著)
Sense of Emptiness: an interdisciplinary perspective. (Cambridge Scholars, 2012, 共編著)
Vision beyond visual perception. (Cambridge Scholars, 2017, 共編著)
Second Language Learning and Cultural Acquisition: an interdisciplinary investigation into culture engraved in language. (Cambridge Scholars, 2022, 共編著)

メッセージ・教育方針

言語やコミュニケーションに関する研究は、我々の生活の一部が対象になっています。面白い研究テーマは思わぬところに転がっているもので、普段から何気ないことにも好奇心をもって接することで、新しい切り口を開発できるかもしれません。

イアン・マレー・リチャーズ 准教授	Ian Murray RICHARDS
専門分野	最終学歴 ▶ マッセイ大学博士課程
ニュージーランド文学論	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

My specialty is New Zealand literature, and I am currently researching the novels of the New Zealand writer and educationalist Sylvia Ashton-Warner.

メッセージ・教育方針

I would like to encourage graduate students to use English communicatively in an academic setting, as if they were exchange students overseas.

【主要業績】

【著書】*A Reader's Guide to the Stories of Maurice Duggan* (Auckland UP, 1998, 単著)
Dark Sneaks In: Essays on the Short Fiction of Janet Frame (Lonely Arts, 2004, 単著)
Do-It-Yourself History: A Commentary on Maurice Sbadbolt's "Ben's Land" (Lonely Arts, 2007, 単著)
New Zealand's Kendrick Smithyman: The Move Towards a Post-Colonial Poetic (Comparative Studies on Urban Cultures, Osaka City University, 2009, 単著)
Vision beyond Visual Perception (Cambridge Scholars, 2017, 共編著)
Second Language Learning and Cultural Acquisition: an interdisciplinary investigation into culture engraved in language. (Cambridge Scholars, 2022, 共編著)

古賀 哲男 准教授	KOGA Tetsuo
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科
アメリカ現代詩	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

研究対象のコアは20世紀のモダニズム詩です（博論テーマとしてWallace Stevens、他にMarianne Moore、Hart Crane、John Berryman、John Ashbery、Gary Snyder、ランゲージ派詩人について執筆、アメリカ現代詩通史をウェブ講義。現在はLangston Hughesを中心とした黒人詩全般を研究）。ヒューズの詩は、大多数の白人アメリカの主体にはない、アメリカ黒人特有な意識を代弁しており、黒人文化としてのブルースやジャズ音楽の歴史的文化表象の意味も追求しています。さらにカナダの主体を代表する詩人 Margaret Atwood にみるアイロニー効果やポストモダニズムの問題を研究しています。

【主要業績】

【著書】『ラングストン・ヒューズ』（大阪教育図書, 2017, 単著） 『ウォレス・ステイーヴンス』（世界思想社, 2007, 単著）
【論文】「冷戦時代の詩人たち」「冷戦とアメリカ文学」（山下昇編, 世界思想社, 2001, 単著）
「ポストモダニズムの終焉とアメリカ詩のゆくえ—アシュベリとスナイダーにみる主体と身体」（『身体・ジェンダー・エスニシティ—21世紀転換期アメリカ文学における主体』鴨川卓編, 英宝社, 2003, 単著）
“What is the Originality in a Popular Verse?: Some Notes on the Original Voice in Langston Hughes' Panther and the Lash” (*Jinbunkenkyu: Studies in the Humanities*, 69 Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, 2017, 単著)
「戯曲『ダッチマン』を通じてみるアメリカの人種的分断」（『黒人研究』91, 黒人研究会, 2022, 単著）

メッセージ・教育方針

ヒューマンイズムの伝統とは何かをともに探求したいと思います。
教育方針としては、言語で書かれた文化表象の意味をその音声的側面を深く考察することによって、言語体験の意味を斬新に捉え直し、英語学習から専門的な文献研究にいたるまでの、包括的な学習体験に生かすことを考えています。

内丸 公平 准教授

UCHIMARU Kohei

専門分野

シェイクスピア

最終学歴 ▶ 東京大学大学院総合文化研究科

学位 ▶ 修士

【研究内容】

シェイクスピアをはじめとした英国ルネサンス演劇、シェイクスピアのアダプテーション、シェイクスピアと英語英文学教育に関わる分野を研究しています。研究の理論的なフレームワークとして、ここ10年ほどのあいだにアジアを中心に勃興してきたグローバル・シェイクスピア研究の知見を取り入れることで、自身の研究をグローバルな地平に位置づける試みを行っています。

メッセージ・教育方針

シェイクスピアの多様性は解釈だけではありません。研究方法も実に多様です。当時の文化的背景に照らして読むのもよし、後世の翻案作品を研究するのもよし、諸外国における受容を論じるのもよし、といった具合です。さらに受容史研究ひとつをとっても、上演、翻訳、映画、教育など、さまざまな分野に枝分かれしています。このようなシェイクスピア研究の多様性にも触れてほしいと思っています。

【主要業績】

【著書】 *Shakespeare in East Asian Education* (Palgrave Macmillan, 2021, 共著)

『緑の信管と緑の庭園』(音羽書房鶴見書店, 2021, 共著)

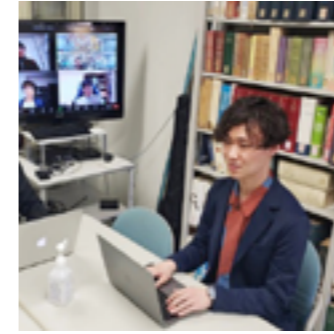
日本シェイクスピア協会編『シェイクスピアとの往還：日本シェイクスピア協会創立六〇周年記念論集』(研究者, 2021, 共著)

Policies and Practice in Twentieth-Century Language Teaching (Amsterdam University Press, 2022, 共著)

【論文】「中等学校におけるシェイクスピアの教材化過程の考察：竹原常太の“The Merchant of Venice”を中心に」(『日本英語教育史研究』36, 2021)

“Education through the study of English: Yoshisaburō Okakura as a conservative reformer” (*Language & History* 62, 2019)

“Teaching Shakespeare in Early Twentieth-Century Japan: A Study of King Lear in Locally Produced EFL School Readers” (*Shakespeare Studies* 56, 2018)



安彦良紀 ABIKO Kazuki

言語文化学専攻 後期博士課程2年
ベルギー国立ブリュッセル自由大学 (ULB) 博士課程留学中

所属

フランス語圏言語文化学領域

研究テーマ

フランス語圏のヒップホップミュージックによる社会的機能の分析

修士論文題目

ポピュラー音楽から見るフランス社会 -ラップフランセの歌詞テキスト分析を通して-

文学研究科を選んだ理由

私は元々、他大学の文学部歴史学科に所属し、フランスの植民地主義について研究していました。その後、様々な文献を読んでいくうちに、現代フランスにおける移民問題やポストコロニアリズムについて興味を抱き、最終的に今の研究テーマへと辿り着きました。日本国内のフランス語圏地域研究の中では先行研究が少ないテーマであったため、進学先となる大学院や研究室探しに苦労していたところ、当時副専攻として履修していたフランス語の先生に出身校である市大の文学研究科を紹介していただいたことがきっかけです。その後、現在の指導教員である福島祥行先生に研究の相談をさせていただき、進学先として本研究科を選びました。

研究内容

フランス語圏のヒップホップミュージックによる社会的機能について、主に歌詞テキストの分析を通して研究しています。1980年代に発祥地アメリカから欧州各国に伝来した文化であるヒップホップは、ゲットー発祥であること、80年代後半の担い手達のほとんどが、都市郊外にする移民の血筋を持つ若者であったことから、フランスにおいては「都市郊外に住む移民の若者の文化」という位置付けがされてきました。しかしながら今日では、ヒップホップ文化の大衆化や表現様式の多様化が進んだことから、一律にこのような位置付けをするのは誤りであると私は考えています。そのため修士論文では、「移民の若者の文化」という立場から差別や排除に抗する楽曲の他、差別として機能しうる楽曲や排外主義、極右支持を唱える楽曲の分析を行いました。また、現在はフランスの他、ベルギーのフランス語圏地域も研究対象としており、それぞれの地域で生み出されるヒップホップミュージックの分析や比較に取り組んでいます。

文学研究科での学び

私が所属するドイツ語フランス語圏言語文化学専攻の学生達の研究テーマは、学部、研究科問わず、多種多様です(言語学や教育に関するテーマの他に、馬やお菓子、映像コンテンツ産業、ポピュラー音楽など)。そのため、専攻内での研究発表の際には、様々な視点から意見をいただける他、新しく学べることも多いです。また、研究科主催のシンポジウムも毎年開催されており、アウトプットや他専攻所属の先生や学生との議論の場にも恵まれています。

将来の目標

博士論文を執筆し、研究者として自立することが一番の目標です。また、将来的には大学教員として、フランス語教育にも携わっていきたくと考えています。

受験生へのメッセージ

本学の文学研究科では、各専攻で多種多様な研究が行われている他、毎年様々なイベントが開催されています。受験を考えている方は是非一度足を運んでみてください。



ドイツ語圏言語文化学専修

言語文化学専攻

専修紹介

本専修では、ドイツ語圏の言語、文学、文化、思想を研究することができます。ヨーロッパ北方、「森の国」と呼ばれ幾多の夢想家や思想家を輩出したドイツと、西欧と東欧のあいだに位置する多様性の国オーストリアは、長い歴史と伝統を持つ国です。それぞれに興味深い研究対象ですが、同じ言語圏に属しながらもはぐまれてきた文化には違いがあり、その違いがまた私たちの知的好奇心を刺激します。原書をじっくり読む、研究会に参加して意見交換を行う、あるいは実際に現地に飛んで資料収集をするなど、真剣に取り組むのに不足はない魅力的な言語圏であるといえるでしょう。

教員3名は、このドイツ語圏を中心として「近・現代文学」「文化」「言語学」を研究していますが、本領域で可能な研究対象については、教室のHPに掲載されている過去の博士論文・修士論文を参考にしてください。

本専修に在籍する大学院生は、自らが関心を抱くテーマを選んで研鑽を積むことができます。2年間の「博士前期課程」修了後、さらに3年間の「博士後期課程」を修了し、「博士論文」の審査に通れば「博士(文学)」の学位が得られます。

教育方針

博士前期課程では、スタッフの専門分野に関連する基礎的なテキスト講読を中心とした授業で語学力を高め、講義科目ではテキスト理解のために不可欠な知識の習得につとめます。スタッフの研究テーマについては次頁以降、授業内容については大学院シラバスを参照してください。並行して論文指導が行われます。博士後期課程では、担当教員の指導のもと博士論文の準備に専念します。

年に3回行われる中間発表会は、修士論文や博士論文を準備する上でよい刺激になるでしょう。研究の進捗状況によっては、学内学会での研究発表、学会誌『セミナリウム』への論文投稿も可能です。また、ドイツ語圏の大学への長期留学もサポートしています。

教室の雰囲気を知りたい方は、当専修のHPをご覧ください。HPのURLはこのページ下にあります。

<https://www.omu.ac.jp/lit/grm/>

専修の特色

教室行事

大阪市立大学ドイツ文学会は2022年4月1日をもって大阪公立大学ドイツ文学会に名称変更しました。この会は、当教室大学院出身者、在学生、教員からなる学会組織です。年に2回、研究発表会を開催しています。

第67回研究発表会(2022年3月31日ハイブリッド開催)

[研究発表]

1. 田島 昭洋：シューベルトと出版商——芸術家と経済市民の関わり——
2. 吉田 芳弘：「A」の場所(トボス)——ゴレム・グリム・宮澤賢治——

第68回研究発表会(2022年10月2日ハイブリッド開催)

[研究発表]

1. Simon Oertle：Anglizismen im Deutschen und Japanischen: ein Vergleich
2. 海老根 剛：引用の技法と歴史の構築：『ボードレールにおける第二帝政のバリ』における詩篇の引用と読解

出版物

大阪公立大学ドイツ文学会では、機関誌『セミナリウム』を刊行しています。

『セミナリウム』第43号

[論文]

1. 言葉が音楽を創るとき —オスカー・ワイルド、ヘートヴィヒ・ラッハマン、リヒャルト・シュトラウスに見る『サロメ』の変容 小川さくえ
 2. ドイツ語の所有冠詞 unser と euer の語形変化にみる e の脱落について —「外国語としてのドイツ語」教育の観点から 信國 萌
 3. Kasuszerfall: der altdeutsche Instrumental und seine Substitution Simon Oertle [研究ノート]
1. アネッテ・フォン・ドロステ=ヒュルスホフの『ユダヤ人のブナの樹』について —ユダヤ人殺しの物語における分身モチーフの意味 深見 茂

所属教員

高井 絹子 (20世紀文学・ドイツ語圏戦後文学、パッサマン)

長谷川 健一 (18・19世紀文化・文学、敬虔主義、ユング=シュティリング)

信國 萌 (現代ドイツ語学・言語学、統語論、意味論、形容詞、コーパス)

高井 絹子 教授

TAKAI Kinuko

専門分野

20 世紀ドイツ語圏文学・文化

【研究内容】

20世紀ドイツ、オーストリアの文学・文化・思想が研究対象です。目下とくにオーストリアの戦後作家の作品を読んでいます。作品を読み解くためのキーワードをいくつかあげれば、言語懐疑、47年グループ、アウシュヴィッツ以後、フェミニズム、パロディ、間テキスト性と幅広いため、戦後ドイツ語圏の社会的歴史的動向はもちろん、ドイツ語圏以外のヨーロッパ文学も関心の対象です。

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（文学）

メッセージ・教育方針

文学作品は、作家の個人史と歴史の交点に生まれます。テキストを精確に読むためのドイツ語力を鍛えるだけでなく、歴史、文化、思想について知識を蓄え、テキスト成立のプロセスをも視野に入れる総合的なテキスト読解力を養いましょう。

【主要業績】

【著書】『インゲボルク・バツハマンの文学』（鳥影社、2018）

【論文】「ウィーン工房と「現代的なもの」 —アドルフ・ロースの装飾批判を手掛かりに」（『都市文化研究』Vol. 21, 2019）

“Ingeborg Bachmanns *Unter den Mördern und Irren* – zur Variierung der Täter-Opfer-Konstellation –”（『オーストリア文学』第33号、2017）

長谷川 健一 准教授

HASEGAWA Kenichi

専門分野

18・19 世紀ドイツ語圏文化・文学

【研究内容】

18・19世紀の文化と文学(作家で言えば、ゲーテ、ユング=シュテイリング、ノヴァーリス等)を、その歴史的・社会的背景も含め、総合的に研究しています。現在は、17世紀後半に始まる信仰刷新運動である敬虔主義(ピエティスム)と、その流れを汲むヘルンフト同胞教団の活動がドイツ語圏の文学作品に与えた様々な影響について、主としてモチーフ研究の観点から考察しています。ここ数年は、ドイツ啓蒙主義研究のプロジェクトに参加しています。

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（文学）

メッセージ・教育方針

文学作品をどのような方法論に基づいて分析・考察するにせよ、まずは原典のテキストにあたり、腰を据えてじっくり読むことが大切です。また、資料の調査・収集に際しては、現地の図書館や資料館に赴き、関係者と積極的に情報交換することをお勧めします。地道な努力は全て、新たな研究の貴重な足がかりとなります。

【主要業績】

【著書】『ドナウ河一流域の文化と文学』（見洋書房、2011、共著）

【論文】“Jung-Stilling und seine Volkslieder”（『セミナーリウム』第39号、2017）

「ユング=シュテイリングの敬虔主義批判—エルバーフェルト体験と「ヘンリヒ・シュテイリングの家庭生活」—」（『ドイツ啓蒙主義研究』第16号、2019）

【書誌】“Pietismus-Bibliographie(Japan)”（*Pietismus und Neuzeit*, Bd.38, 2012, Vandenhoeck & Ruprecht）

【翻訳】「シュバイツァーの説教から（承前）」（『シュバイツァー研究』第33号、2020、共訳）

信國 萌 講師

NOBUKUNI Moe

専門分野

現代ドイツ語学・言語学

【研究内容】

現代ドイツ語を対象に、形容詞と構文の統語論的・意味論的關係を、特に事象の捉え方（アスペクト）という視点から研究しています。事象だけでなく、命題を表す語句と形容詞の關係にも関心を持っています。また、書き言葉の表記ゆれにも興味を持っており、形容詞や冠詞を中心に、コーパスなどを用いた実例に基づく語句の使用実態の調査も行っています。

最終学歴 ▶ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所

学 位 ▶ 博士（学術）

メッセージ・教育方針

ドイツ語を言語学的に分析するためには、ドイツ語の正しい（とされている）規則を理解していることが重要です。ただし、実際のドイツ語は常に文法の規則通りに使用されているわけではありません。具体的な言語現象を丁寧に観察・分析して、「どうなっているのか」「それはなぜか」を考えていきましょう。

【主要業績】

【論文】「書き言葉におけるドイツ語の弱音 e の脱落について—格変化語尾を伴う unser, euer を対象に—」（『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座—成田節教授退職記念論文集—』、2023）

“Zum syntaktischen Verhalten der den Genitiv oder den Akkusativ regierenden Adjektive im Deutschen – mit Fokus auf die Verwendung des Korrelats „es“ –”（『ENERGEIA（エネルギーイア）』第38号、2013）

【研究ノート】「人と出来事の性質を表すドイツ語形容詞に関する一考察— gut, schön の意味的結合価に着目して—」（『セミナーリウム』第42号、2020）

フランス語圏言語文化学専修

言語文化学専攻

専修紹介

本専修は、ドイツ語圏言語文化学専修と連携することで、過去も現在も欧州を牽引するドイツとフランス両国を中心としつつ、ベルギー、スイス、ルクセンブルクなどの欧州や、ケベックやハイチなど南北米大陸、アルジェリア、チュニジア、モロッコ、セネガル、コートディヴァールなどアフリカ、タヒチなどオセアニアにひろがる世界のフランス語圏の言語、文学、文化、歴史、社会などについて、教育・研究・社会貢献をおこなっている。かつての名称である「フランス語フランス文学専攻」は、ほかの大学においてもなされる学問領域をあらわしていたが、フランス語圏学を標榜する大学はきわめてすくない。このことは、もちろん、伝統的フランス文学研究をすてざるものではなく、そのうえに、ひろく世界のフランス語圏に眼をむけていることをしめしている。

本専修の教員は、20世紀文学、言語学・言語教育学、文化研究を専門としているが、それぞれ興味、関心の範囲はひろく、これまで指導した学生の論文については、文学研究はもちろんのこと、外国語教育・学習、メディアの言説分析、宗教文化の歴史的展開、挿絵論、ダンス論、建築、ミュージアム、馬事文化、ラップなどのテーマについての指導をおこなってきた。

また、現役の院生と教員にくわえ、OB／OG院生、退職教員からなる専修内の学会を組織し、研究発表会・シンポジウムのほか、年刊機関誌『Lutèce』を発行、研究成果の公表につとめている。

なお、社会人大学院生にたいする、研究環境についての個別配慮もおこなっている。

教育方針

「フランス語圏学」をかかげる本専修では、ひろくフランス語圏に関する言語、文学、文化、社会、歴史をあつかうが、博士前期課程の学生にたいしては、その専門にかかわらず、できうかぎり広範囲な学びの機会を提供し、同時に、論文執筆のための教養を授業の内外において提供することにより、学生自身がみずから課題を発見、解決していきけるような自律的研究者にそだてる。修士論文執筆へむけてのおもなスケジュールは、以下のとおりである。

1年次 4月 テーマ提出、指導教員決定

1年次 5～12月 毎月の中間報告会

2年次 10月～12月 論文執筆

2年次 1月 修士論文提出

また、博士後期課程の学生にたいしては、その専門によりそい、3年間で博士論文を執筆できるよう、学会誌投稿論文執筆など最大限の便宜をはかると同時に、国内外の学会や研究会出席、留学などをサポートすることで、学生の経験値をゆたかにすることをめざしている。

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/frn/>

専修の特色

教室行事

現役の院生と教員にくわえ、OB／OG院生、退職教員からなる専修内のフランス文学会において年に2度の研究会やシンポジウムを開催し、世代を越えた学びと交流の機会を提供している。そのほか、巴里祭や教育研究雑談会など学部と共通の懇親行事を実施している。

◆ 2022年度 研究発表会

(2022年10月29日 大阪公立大学杉本キャンパス& Zoom ハイブリッド開催)

1. 大山大樹「グループワークにおけるページめくり」

2. 藤本智成「『地の糧』を読む寺山修司」

(なお、研究会後「森本英夫先生を偲ぶ会」を開催)

出版物

上記の学会において、大学院生をはじめとする会員が研究成果として論文(査読有)を公表するため、年刊研究誌『Lutèce (リュテス)』を発行している。

◆ 2022年度『Lutèce』49号(2022年12月1日発行)

(論文)

小倉博孝「フランス古典主義文学規範の成立と劇詩の有用性——シャブランの『詩学』受容を中心に」

秋吉孝浩「テオフィル・ゴーチエのスペイン——旅行記における『風景』の参照」

傳田久仁子「『ミューゼ・フィリボン』におけるペローのパロディ——カムによる同時代性の挿入」

福島祥行「ひとはことばの(意味)を知らぬままに話したず——記号の相互行為的生成の機序について」

洪明徹「フランス語ユニバーサルデザイン教科書の必要性をめぐる考察——初等中等教育における学習機会拡大を目指して」

安彦良紀「ベルギーフランス語共同体におけるラップの現在——ミュージックシーンのグローバル化」

畔堂洋一「フランス映像産業システムを俯瞰する——『日本版CNC』の設立に向けて」

その他の特色

フランスの4大学との国際交流協定(CYセルジー・パリ大学、ル・アーヴル大学の2校は全学、リヨン第三大学、トゥール大学の2校は文学研究科の協定)により、留学生の受入と派遣、双方の学生間交流に力を入れており、その一環として大学院の授業ではトゥール大学の大学院生とフランス語教育実習を共同で実施している。

また、教員の所属学会には、上記の専修内の学会のほかに日本フランス語フランス文学会、日本フランス語学会、日本フランス語教育学会、日本演劇学会、外国語教育メディア学会、日本語学会、社会言語学会、日本語政策学会、日本外国語教育推進機構、日仏女性研究学会があり、多様な視点やアプローチから最新の研究動向に目配りしている。

所属教員

福島 祥行 (応用社会言語学、相互行為分析、言語教育-学習、ポトフォリオ、仏語学、仏語圏学、社会的レジリエンス創発)

白田 由樹 (19世紀末フランスのジェンダーとエスニシティの表象、19世紀フランス語圏都市文化)

原野 葉子 (20世紀フランス文学における言語遊戯と科学、ヴィアン、ウリボ)

大山 万容 (教育社会言語学、複言語教育、言語意識、言語政策、フランス語教育)

福島 祥行 教授	FUKUSHIMA Yoshiyuki
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科
言語学・フランス語圏学	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

わたしの研究の関心は、言語、相互行為分析、協働学習、ポートフォリオ、現代フランス語圏社会、社会的レジリエンス創発と多岐にわたりますが、その中心にあるのは「コミュニケーション」です。コミュニケーションとは、ひととひととのやりとり（相互行為）のことですから、すべてはコミュニケーションの問題に帰着するとわけです。具体的には、会話の現場のマイクロ分析や、学びあい、言語学習法、言語の政治性、社会的レジリエンスの創発などについて、相互行為論と生態学的から研究しています。

【主要業績】

【著書】『キクタン フランス語会話 入門編』（アルク、2016）

【論文】「ひとはことばの《意味》を知らぬままに話しだす——記号の相互行為的生成の機序について」（*Lutèce*, 49, 大阪公立大学フランス文学会, 2022）

「遠隔授業における「アクティヴ」「学び手としての教師」（*RENCONTRES*, 35, 関西フランス語教育研究会, 中條健志・大山大樹と共著, 2021）

「すれちがいの意味論—維新派のことばと相互行為—」（永田靖編『漂流の演劇』大阪大学出版会, 2020）

白田 由樹 教授	SHIRATA Yuki
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科
19世紀末フランス語圏文化	学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

19世紀末フランスにおける芸術・文学作品、演劇、ほか各種メディアの中で描かれた「女性」について、伝統的な男女観の変化や当時の社会状況とともに研究しています。現在までに、19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した女優サラ・ベルナルを「新しい女性」としてとらえなおし、その自己表象のあり方を再検討する研究を行ってきました。また、近年はジェンダーの視点だけでなく、人種や民族に関するさまざまなイメージの生成過程を、当時の文学、演劇やアールヌーヴォー運動、報道や批評言説の中に探っています。

【主要業績】

【著書】『サラ・ベルナル—メディアと虚構のミューズ—』（大阪公立大学共同出版会, 2009）

【訳書】『マルペルチュイ ジャン・レー/ジョン・フランダース怪奇幻想作品集』（岩本和子・井内千沙・原野葉子・松原冬二と共訳, 国書刊行会, 2021）

【論文】“Sarah Bernhardt comme la Muse de la décadence: Roman à clef *Dinab Samuel* de Champsaur,” (*Lutèce*, no.38, 2010, 大阪市立大学フランス文学会 2010)

「サラ・ベルナルの愛国劇 —ふたつのジャンヌ・ダルク劇から—」（*Lutèce*, no.42, 大阪市立大学フランス文学会, 2015）

「ヴァン・デ・ヴェルデの装飾デザインにおける原始性志向—世紀末ベルギーの文芸思潮と「未開民族」の言説から—」（『人文研究』第70巻, 大阪市立大学大学院文学研究科, 2019）

メッセージ・教育方針

学問の先達としてできるかぎりのサポートをおこなうことはいうまでもありませんが、教えることは学ぶことであり、教員もまた学びつづける存在です。ともに学ぶことを第一にしつつ、言語や社会に関心のあるみなさんと、あらたな学問を生みだしてゆきたいとかがえています。

メッセージ・教育方針

学問の先達としてできるかぎりのサポートをおこなうことはいうまでもありませんが、教えることは学ぶことであり、教員もまた学びつづける存在です。ともに学ぶことを第一にしつつ、言語や社会に関心のあるみなさんと、あらたな学問を生みだしてゆきたいとかがえています。

メッセージ・教育方針

フランスへの憧れからこの分野に入る人は（全てではなくとも）多いと思いますが、私もそうして研究を始め、「フランス的なものとその周辺」の生成過程を追う間に、自分が生きている今の日本を意識することが増えました。

心に引っかかる事象を探究しながら、広がり、つながる世界を見出し、言葉で語る力をお互いに鍛えていければと思います。

メッセージ・教育方針

フランスへの憧れからこの分野に入る人は（全てではなくとも）多いと思いますが、私もそうして研究を始め、「フランス的なものとその周辺」の生成過程を追う間に、自分が生きている今の日本を意識することが増えました。

心に引っかかる事象を探究しながら、広がり、つながる世界を見出し、言葉で語る力をお互いに鍛えていければと思います。

メッセージ・教育方針

フランスへの憧れからこの分野に入る人は（全てではなくとも）多いと思いますが、私もそうして研究を始め、「フランス的なものとその周辺」の生成過程を追う間に、自分が生きている今の日本を意識することが増えました。

心に引っかかる事象を探究しながら、広がり、つながる世界を見出し、言葉で語る力をお互いに鍛えていければと思います。

メッセージ・教育方針

フランスへの憧れからこの分野に入る人は（全てではなくとも）多いと思いますが、私もそうして研究を始め、「フランス的なものとその周辺」の生成過程を追う間に、自分が生きている今の日本を意識することが増えました。

心に引っかかる事象を探究しながら、広がり、つながる世界を見出し、言葉で語る力をお互いに鍛えていければと思います。

原野 葉子 准教授	HARANO Yoko
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院人間・環境学研究科
現代フランス文学・文化	学位 ▶ 博士（人間・環境学）

【研究内容】

専門は20世紀フランス文学・文化。とくに実存主義時代のユースカルチャーを牽引したボリス・ヴィアンの文学作品と、彼が属した前衛的研究集団「コレージュ・ド・パタフィジック」、それからコレージュの下部組織として出発した「潜在文学工房」を主な研究対象としています。「科学とは何なのか?」という問いを芸術・文学の側から思考するとともに、西洋近代における科学技術の高度な発展の必然的帰結としての「世界大戦」、その記憶と表象の問題についても考察を進めています。

【主要業績】

【訳書】ボリス・ヴィアン『夢かもしれない娯楽の技術』（編訳, 水声社, 2014）

レーモン・クノー『文体練習』（松島征・福田裕大・河田学と共訳, 水声社, 2012）

【論文】“Boris Vian et la sémantique générale : logique du non” (*Lutèce*, no.45, 大阪市立大学フランス文学会, 2019)

“Science et littérature chez Boris Vian : autour de la discontinuité” (*Études de langue et littérature françaises*, no.107, 日本フランス語フランス文学会, 2015)

「微視的な眼—『日々』の泡』のマテリアリスムについて—」（『広島大学フランス文学研究』第31号, 広島大学フランス文学研究会, 2012）

大山 万容 講師	OYAMA Mayo
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院人間・環境学研究科
複言語主義・複言語教育	学位 ▶ 博士（人間・環境学）

【研究内容】

20世紀末にフランス語圏でうまれた複言語主義(plurilingualisme)は、個人が持つ複数の言語・文化的レパートリーを「資産」とみなし、それらを活性化し、伸ばしていくことで、より良い学習ができるという考え方です。この視点から言語と社会、教育とのかかわりを研究しています。これまでに日本の小学校や大学での言語教育を中心として、さまざまな複言語教育の実践に関わり、分析の対象としてきました。現在は言語景観や、言語の視覚的側面に注目した研究にも関わっています。

【主要業績】

【著書】『言語への目覚め活動 複言語主義に基づく教授法』（くろしお出版, 2016, 単著）

『多言語化する学校と複言語教育 移民の子どものための教育支援を考える』（明石書店, 2022, 共編著）

【論文】“Quand l’ Éveil aux langues rejoint la poésie plurilingue.Explorations esthétiques à l’ école élémentaire au Japon” (*www.forumlecture.cb*, 2022)

“Plurilingual and Intercultural Education: A Cross-Disciplinary Practice around Chocolate in an Elementary School in Japan” (*Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 27(1), 1-25, 2021))

「フランス語学習を準備する小学校での複言語教育：言語への目覚め活動の事例から」(*Revue japonaise de didactique du français*, Vol.16, 25-41, 2021)

言語応用学専修

言語文化学専攻

専修紹介

言語応用学専修は、個別言語の諸特性を研究対象とすることに加えて、複数の言語の対照研究、言語獲得の研究といった多角的な観点から言語を分析することを目的としています。本専修は、各教員の主な研究分野の講義・演習とともに、教員、学生全員が参加する合同ゼミに特色があります。院生は、自分が興味をもつ分野を中心に研究することができますが、合同のゼミでは、発表内容に関して多様な観点から、助言を受けることができます。様々な研究歴をもつ院生の中には留学生も多く、研究の方向、関連文献の紹介など基本的な事柄に関しても十分な指導を受けることができます。教員の専門は、アジア諸語を研究材料とする言語類型論的・認知言語学的研究、様々な言語理論に基づいた日英語の語用論・文法論・母語と外国語の相乗効果を狙う外国語教授法・第二言語習得論と英語教育学、英語語彙史研究など多岐に渡っています。各教員はそれぞれの専門分野の特性を生かしながら、文化的コンテクストも含めた言語の多面的特性を研究しています。

教育方針

本専修では文献研究とともに、様々な言語媒体およびコーパスに基づいた言語事実を重視する指導を行なっています。理論研究も重要ですが、自ら実際に収集した事実により、先行研究の不備を明らかにしたり、新たな言語現象の発掘に基づいた問題の提起など実証的な研究を重視しています。本専修は、社会人学生、留学生が多いことも特色のひとつです。彼らは実際の教育の中から生まれた疑問・問題点の解明を求めて研究し、あるいは帰国後の日本語教師としての立場から、母語と日本語の対象研究を行なっています。院生は課題を自由に設定することができますが、その動機を尊重しながら、課題の妥当性、使用する言語資料の妥当性、拠り所となる言語理論の選択およびその妥当性などについて十分な指導を心がけています。

専修の特色

教室行事

教員、院生全員が参加する合同ゼミを月に1回程度開催しています。ここでは、院生の修士論文、博士論文作成のための研究発表をもとに、教員、院生による自由で活発な議論がなされています。

毎年11月の初めに「言語情報学会」を開催しています。そこでは、教員、大学院生の研究発表といったアカデミックな場と卒業生、修了生の近況報告といった同窓会的な場が提供されています。

出版物

毎年3月末に研究誌『言語情報学研究』を刊行しています。

所属教員

山崎 雅人（言語類型論、認知言語学）

田中 一彦（意味論、語用論）

辻 香代（第二言語習得研究、英語教育学）

小倉 雅明（辞書学、文体論）

山崎 雅人 教授		YAMAZAKI Masato
専門分野	言語学	最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科
		学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

言語学一般の知識を基礎として、中国最後の王朝清朝を建てた満洲族の言語である満洲語（文献上の言語を指す場合は「満洲語文語」と言う）を研究（手段や道具を表すふたつの具格接辞の使い分けなど）するとともに、この言語に加えて、トルコ語やモンゴル語、それに日本語と朝鮮語を含む「アルタイ・タイプ」の言語に共通の現象（「知る」「なる」「見る」の文法化など）を認知言語学的方法により研究しています。「見る」の文法化では、広くアジアの20以上の言語に見られる試行の意味（「～してみる」）も研究しています。

【主要業績】

【論文】「満洲語文語におけるモダリティ表現としての -ra/re/ro + bihe について」（『満族史研究』第21号, 2022）
「ベトナム語の視覚動詞 xem の文法化について—「一方向性仮説」に基づく解釈—」（『日本認知言語学会論文集』第22巻, 2022）
「タイ語の視覚動詞 duu の文法化について—ベトナム語、中国語、朝鮮語及び日本語との通言語学的研究—」（『年報タイ研究』第20号, 2020）
「满文与阿尔泰语系、朝鲜语以及日语中的视觉动词语法化问题初探」（『满学论丛』第7輯, 2017）

田中 一彦 教授		TANAKA Kazuhiko
専門分野	意味論・語用論	最終学歴 ▶ 筑波大学大学院文芸言語研究科
		学位 ▶ 博士（文学）

【研究内容】

研究テーマは大きく2つに分けられます。1つめは、英語の時制研究です。英語の時制に関わる様々な現象や時の解釈に関わる問題を文レベルの要因にとどまらず、談話レベルの要因を考慮に入れた包括的な分析をするのが私の時制研究の特徴といえます。2つめは、我々の身近な言語表現の言語学的分析です。たとえば、巷で日本語の誤用としてよく耳にする「全然おいしいよ」といった「全然+肯定形」表現や、道路で我々がよく目にする「落石注意」といった表現に注目し、それらの言語学的分析を試みています。

【主要業績】

【論文】“On the Non-Perfect tense in the temporal Since-Construction in Discourse,” (*Distinctions in English Grammar offered to Renaat Declerck*, Kaitakusha, 2010)
「「心的惰性」による時制の照応は存在するのか？」（『言語情報学研究』第16号, 2020）
「機能文法的観点から見た時制の照応」（『言語情報学研究』第15号, 2019）
「日常生活に“潜む”古典的カテゴリー化 —トートロジーの場合—」（『言語情報学研究』第14号, 2018）

辻 香代 准教授		TSUJI Kayo
専門分野	第二言語習得研究・英語教育学	最終学歴 ▶ 京都大学大学院教育学研究科
		学位 ▶ 博士（教育学）

【研究内容】

母語使用は第二言語習得の発達を阻害するという見解が存在します。脳内思考において、両言語は切り離すことができるのでしょうか。私は、日本人学習者が産出する英語プロダクトのクオリティを高めるために「母語使用」に着目しています。具体的には、機械翻訳の言語処理プロセスに着眼し、和文和訳プロセスの類型化を試みています。また、脳科学からの言語習得メカニズムへのアプローチにも面白さを感じています。脳のコミュニケーション関連領域の言語習得（母語・外国語）への関与実態とその神経的役割の解明は、新たな外国語教授法の開拓に寄与すると考えています。

【主要業績】

【論文】「Developing and Evaluating a Scoring Rubric for Argumentative Essays: A Module-Based Approach」（『Urban Scope』, 第12号, 2021）
「Effects of L1 Use on L2 Text Quality: Rethinking Cognitive Process of Formulating L1 Texts during L2 Writing」（『English Language Teaching (Canadian Center of Science and Education)』, 第14巻, 2021）
「母語バランゲーシングの教育的効果に関する調査 —機械翻訳の制限言語に着眼して—」（『人文研究』, 第73号, 2021）

小倉 雅明 講師		OGURA Masaaki
専門分野	辞書学・文体論	最終学歴 ▶ 東京大学大学院総合文化研究科
		学位 ▶ 修士（学術）

【研究内容】

英語の辞書やその歴史に主な関心があります。具体的には18世紀英国の辞書編纂家・文筆家であった Samuel Johnson の文体や言語的な特徴に興味があります。とくに、Johnson が『英語辞典』（1755）を編纂していた時期に刊行した定期刊行物、The Rambler における彼の言語使用について、文法の観点から後期近代英語と照らし合わせてどのような特徴をもつか、その言語使用がどの程度規範的であったか（あるいはなかったか）について探っています。

【主要業績】

【論文】“An Analysis of Johnson’s View of Knowledge: A Corpus-Stylistic Approach,” (*Johnson in Japan*, Bucknell University Press, 2020)
“Authors who inspired Samuel Johnson’s language use in *The Rambler*: an investigation of his reading sources based on a phraseological unit “of our present state.” (Lexicography, 5(2), Springer, 2018)